



★最新介護医療情報★

テーブル席は横が高リスク 理研、スパコン富岳で確認 (共同通信社 2020.10.14 配信)

理化学研究所のスーパーコンピューター「富岳(ふがく)」で新型コロナウイルス対策の評価を進める同所などのチームは13日、「飲食店の4人掛けテーブルで最も飛沫(ひまつ)をかぶるリスクが高いのは、感染者の正面ではなく横に座る人」などとする飛散シミュレーション結果を発表した。隣り合う席の間に仕切りを設けるなどの対策と換気を組み合わせるのが重要だとしている。

また、福島や岐阜などで集団感染があった合唱のリスクも調べた。歌は会話の数倍の飛沫が発生し、多人数で同じ方向を向いて歌うと、前列の演奏者に向かう流れが発生する。これに対し、口元を覆うシールドを着けると流れが抑制されるとした。人数を絞るのもリスク低減に有効という。

今回は忘年会のほか、ベートーベンの合唱付き交響曲「第九」演奏会など、冬場のイベントへの対策を検討した。

飲食店のシミュレーションでは縦60センチ、横1・2メートルの標準的な大きさのテーブルに2人ずつ向き合って座り、相手に顔を向けてしゃべるシーンを想定。感染者の横に座った人は距離が近いと、浴びる飛沫は感染者の正面に座った人の5倍、はす向かいの20倍になった。飛沫は直進傾向が強く、話す相手以外にはほとんど届かなかった。

理研の坪倉誠(つぼくら・まこと)チームリーダーは「正面の席からの飛沫は顔に装着するシールドで防ぎ、横の席への対策としては仕切りが有効だ」と話した。

iPSで新型コロナ治療へ 京大技術、免疫細胞作製 (共同通信社 2020.10.15 配信)

藤田医大(愛知県豊明市)は14日、京都大発医療ベンチャー「リバーセル」と、人工多能性幹細胞(iPS細胞)を使った新型コロナウイルス感染症の新しい治療法開発に乗り出すと発表した。京都大の技術で、新型コロナに感染した細胞を攻撃する免疫細胞「キラーT細胞」をiPS細胞から作製し、患者に投与する。2~3年以内の臨床応用を目指す。リバーセル取締役の河本宏(かわもと・ひろし)・京都大教授(免疫学)は「この治療法が切り札となり、重症者を救えるようになれば怖い病気ではなくなる。早期の実用化を目指したい」と話した。

河本教授によると、京都大の財団が備蓄する、拒絶反応が起きにくいiPS細胞を使う。多くの患者を受け入れてきた藤田医大が持つ回復した患者の情報から、より攻撃力の高いキラーT細胞にするための遺伝子を特定し、iPS細胞に導入。河本教授が開発した方法でキラーT細胞に変化させる。

こうして作ったキラーT細胞は冷凍保存でき、必要な時に解凍して患者に点滴できる。キラーT細胞は感染した細胞しか攻撃せず、副作用が少ないと期待される。高齢者や基礎疾患があるなどして重症化リスクの高い患者での使用を想定している。

地域ルピナス講習会のお知らせ

延期中

第69回東大阪地域リハビリ勉強会
⇒理学療法アプローチとリスク管理について
～パーキンソン病症例を通して～

開催日：日程検討中
時間：午後6時30分～午後7時30分
場所：東大阪市立東体育館 第三研修室
講師：ルピナス理学療法士 井上直大

第28回城東地域リハビリ勉強会
⇒認知症予防に向けた運動

開催日：日程検討中
時間：午後6時30分～午後7時30分
場所：城東区民センター 第3小会議室
講師：ルピナス理学療法士 武田勇二

第39回忠岡地域リハビリ勉強会
⇒知っておきたい救急処置の基礎知識
～高齢者の心疾患～

開催日：日程検討中
時間：午後6時30分～午後7時30分
場所：忠岡町文化会館 地下会議室
講師：ルピナス理学療法士 松浦新吾

